

2. 地域で学ぶ国際理解と平和の学習

—— 中1、野外学習のテーマとして ——

原 幸 宏 丸 山 豊

【抄録】 中学1年生における社会科野外学習を、本校の教育目標として合意された「国際理解と平和の教育」の導入として、班別学習形態で取り組んだ実践報告である。「国際理解」と「平和教育」を地域学習として展開するにあたり、様々な方法と試みが考えられるが、本論は、社会科のみならず担任団を含め、教育活動の総合化の視点から論述したものである。

【キーワード】 国際理解と平和の教育、中学生と国際理解、地域からの平和教育、教育活動の総合化

I. 「学校改革」の実践として

1990年度は、名古屋大学教育学部附属中・高等学校にとって、あらゆる点でその力量と教育力が問われた年であった。それは、前年度より取り組んでいる「学校改革」（附属学校としての在り方の集大成の論議）の教育目標テーマが「平和と国際理解の教育」とうたわれ、これを単なる「お題目」に終わらせてはならないという点でいわば昨年度は学校改革元年でもあったからである。この年、中学1年生の社会科を担当した原（地理）と丸山（歴史）は、過去12年間にわたり実施されたきた社会科野外学習を一步前進させ「国際理解と平和の教育」の中1段階での導入として考えていくことで、社会科教科会・中1学年担任会と共に実践に踏みきることとした。

本校における中1野外学習の歴史を振り返ると、大きく二分されよう。1977（昭和52）年度を第1回とし1986（昭和61）年度までの10年間は、主として地理的分野、歴史的分野を中心に、貸切バス利用の社会見学的要素の強い形態をとってきた。しかし、受身的学習方法を何とか改善し、調べ方、学び方、そして何より社会科の基礎学力を育てるための野外学習に近づくため、グループ別テーマ学習（班行動を中心とした）に切り換えたのが1987（昭和62）年からであった。社会科担当教師5名が指導にあたるわけであるが、グループ別野外学習はテーマの多様化が長所でもあり問題点でもあった。今回は「国際理解」と「平和教育」の2点に絞り、それぞれのグループが1カ所ずつ、計2カ所を訪問取材するという形をとることで統一性を図ることとした。この野外学習の位置付けを、①学校改革の実践の試みとする、②中1担任団と社会科の共同指導とする、③11月に予定されている本校の中等教育研究協議会（テーマ、教育活動の総合化—国際理解と平和の教育を軸として—）で、「野外学習の取り組み」

を社会科担当と担任のチームティーチングでの公開授業として行う、の3点を確認した。

本論は主として訪問地、訪問先の決定に至るまでとそのねらい、生徒の事前、当日、事後の取り組みと指導、「国際理解」「平和教育」の二大テーマに対する生徒の学習と認識の深まりなどに触れ、今後の野外学習を含めた学習活動、方法の在り方を考えていくものである。

II. 訪問先の決定とそのねらい

国際理解教育と平和教育をどう結びつけるのか。また中学1年生が理解し今後の学習や生き方に役立つためには、どこをどう選んだら良いのか、また、2学級12グループでそれぞれ適したテーマを設定できるのか、数々の難問が存在した。また教師側から訪問先の押し付けにならないよう、生徒にどう問題意識を深めさせ得るのか、まさに我々教師の指導力の問題でもあった。

1. 地域で学ぶ国際理解と平和の学習に対する考え方

前述した諸問題を解決するために、テーマに対する基本的な考え方を整理したうえで訪問先の候補を挙げる必要が生じた。

(1)国際理解教育については、単なる外国文化、外国人との接触に留まることなく、日本とアジアの関係も重視し、その歴史的背景、及び現在の我が国がかかえる課題にも、地域からの目を向けさせていきたい。

(2)平和学習については、国際理解を基礎として、15年戦争の聞き取りを中心とし被害とともに加害の立場からも戦争を考える出発点としたい。

以上をもとに候補を考えていった。

2. 「国際理解」を中心とした訪問先候補

アジアに視点を置いた訪問先となると限定されてしまう。まず、名古屋市内にある大使館・公使館及び留學生関係の諸施設、国際センターなどが考えられた。

同じ中学生の交流を目的とするなら「愛知朝鮮中高級学校」(豊明市)、「国際学園」(守山区)。特に「朝鮮中高級学校」の訪問が実現できるなら画期的なことであると同時に国際理解と平和教育が一体化する。アジアの民衆に焦点を合わせると、「アジア保健研修所—AHI—」(日進町)が挙げられる。一昨年、本校 P. T. A. の研修会として AHI より講師を招き、民間レベルの保健活動、医療援助を通して草の根の交流を行っている機関であることを知り、父母からも是非子ども達に学習して欲しいとの声もあったところである。行政の立場から「国際研修センター」、「国際センター」をはじめ、「県庁国際課」、「名古屋市役所国際交流課」等、愛知・名古屋の国際化の現状も学ばせたい。また、外国人労働者の増大に伴う様々な問題を「愛知県警」「法務局入国管理局」などから考えさせたい。国際化を物の流れで捉えるには「名古屋港」「名古屋空港」はどうか等、中学1年生にはむずかしすぎるくらいの課題と訪問先の候補があげられた。

3. 「平和学習」としての訪問先の決定に至るまで

中学1年生で、歴史学習も終了していないのに、なぜ平和、戦争学習なのか、という問に対し私達は「子ども達は、それぞれの発達段階に応じ、いつ、どこでも新鮮にそして謙虚に平和、戦争、の問題を受けとめてくれる」ことに自信を持ちたい。

野外学習12月7日の実施に対し、夏休みの課題として「身近な人から戦争についての聞き取り」調査の課題を与え、興味、関心を問題意識にまで高めておく必要はあった。まず、空襲の実態とその掘りおこしの運動として、「熱田空襲」「愛知時計空襲」については熱田空襲を記録する会の小島守氏から、また名古屋空襲

の体験とその後平和を守るため「平和地蔵」を建立し、現在まで供養しつづけている難波さかえさんから、また戦争が人間だけでなく動物まで巻き込んでしまった事実を東山公園の元園長、浅井健氏から、その動物園で殺される運命にあったゾウを戦争から守り抜き、戦後の子ども達に夢を与えたという実話を調査研究して絵本『ぞうれっしゃがやってきた』に著した小出隆司氏から、戦争体験、記録する運動、平和を守る運動など、名古屋の地域から実に多くのものを学ぶことができると思いつつ、様々な方の候補が挙がった。

また、本校社会科の田中裕己教諭が被爆者(長崎)でもあり、中学3年生の修学旅行ヒロシマの事前学習を兼ねて愛知在住の被爆者の方からの聞き取り(愛友会、遠藤泰生氏)、1944年12月7日、戦争のさ中の大地震(東南海地震)の際、軍需工場で犠牲となった朝鮮人女子挺身隊を調査、研究し昨年慰霊碑を建立し今も韓国へ出かけながら証言を集めている高橋信氏から、ユニークなところでは、空襲の際、B29を迎へ撃った体験の持主でもあり、現在まで見晴台で高射砲遺跡の発掘・研究を続けていた池田陸介氏から、中学1年生だけに学習させるには余りにも多様なそして多くの研究とそれぞれの方の生き方に驚くばかりである。この他にも実現はできなかったが、刈谷の依佐美基地を見学させる案も浮上した。

4. 訪問先の一覧

12月7日という限られた日時、我々の一方的な都合とお願いに対し、実に快く、中学生の学習に役立つならと時間を合わせていただくなどして、当日の訪問先が決定した。午前中「国際理解」、午後は「平和学習」とした。

中1 野外学習訪問先一覧表

上段：午前 下段：午後

組 班	訪 問 先	所 在 地	電 話	案内説明者	顧問
A-1	名古屋国際研修センター (10時~11時30分)	名東区亀の井2-73	702-1391	山田氏	酒井
	名古屋東山動物園動物館 (13時30分~15時)	千種区東山元町	782-2111	浅井氏	酒井
A-2	アジア保健研修所 (10時~12時)	愛知郡日進町米野木字南987-30	05617-3-1950	近藤氏	中村
	名古屋見晴台考古資料館 (13時30分~15時)	南区見晴町	823-3200	池田氏	中村
A-3	名古屋港管理組合総務部広報係 (9時30分~10時30分)	港区入船1丁目8番21号	661-4111	杉浦氏	山田
	日清紡績工場地内東南地震記念式典 (13時~15時)	南区道德本町日清紡績工場内	652-5858	熱田高校 高橋先生	山田
A-4	愛知県警察本部広報課 (9時30分~10時30分)	中区三の丸2-2-1	951-1611	真田氏	原
	名古屋見晴台考古資料館 (13時30分~15時)	南区見晴町	823-3200	池田陸介氏	中村
A-5	名古屋市役所国際交流課 (9時~10時30分)	中区三の丸3-1-1	972-3062	近藤氏福谷氏 キャッシー田中氏	田中
	愛知被爆者の会愛友会 (13時30分~15時)	北区黒川本通り2-11-1 コーポタニグチ2-A	991-3044	遠藤泰生氏 水野氏	田中

地域で学ぶ国際理解と平和の学習

A-6	名古屋国際学園（9時30分～11時）	守山区中志段味南原2686	736-2025	先生、生徒	山本
	愛知時計空襲跡（熱田空襲）（13時30分～15時）	熱田区白鳥1-10-33	671-1403	小島守氏	山本
B-1	愛知朝鮮中級・高級学校（9時30分～11時）	豊明市栄町南館55	0562-97-1324	先生、生徒の皆さん	丸山
	平和地蔵・中区吹上ホール西 千早交差点（13時30分～14時30分）	連絡先 名東区社台3-17-3	776-9562	難波さかえ氏	丸山
B-2	名古屋国際学園（9時30分～11時）	守山区中志段味南原2686	736-2025	先生、生徒	山本
	名古屋東山動物園動物館（13時30分～15時）	千種区東山元町	782-2111	浅井氏	酒井
B-3	名古屋市役所国際交流課（9時～10時30分）	中区三の丸3-3-1	972-3062	近藤氏福谷氏 キャッシー田中氏	田中
	名古屋見晴台考古資料館（13時30分～15時）	南区見晴町	823-3200	池田陸介氏	川田
B-4	愛知朝鮮中級・高級学校（9時30分～11時）	豊明市栄町南館55 （名鉄 中京競馬場前 下車）	0562-97-1324	先生、生徒の皆さん	徳井
	愛知時計空襲跡（熱田空襲）（13時30分～15時）	熱田区白鳥1-10-33	671-1403	小島守氏	徳井
B-5	愛知県警察本部広報課（9時30分～10時30分）	中区三の丸2-1-1	951-1611	真田氏	原 原 原
	愛知県庁国際課（11時～11時30分）	中区三の丸3-1-2	961-2111	田中・杉本氏	
	名古屋国際センター内アメリカンセンター情報サービス課（13時～14時）	中村区那古野1-47-1	581-5678	佐藤氏	
B-6	名古屋国際センター内アメリカンセンター情報サービス課（9時30分～10時）	中村区那古野1-47-1	581-5678	渡辺氏	川田
	日清紡績工場内東南地震記念式典（13時～15時）	南区道德本町日清紡績工場内	652-5858	熱田高校 高橋先生	山田

A-1、B-2 は別の日時に日比津小教諭 小出隆司氏を訪問

Ⅲ. 学習成果をあげるための指導過程

1. 問題意識高揚への取り組み——予察的学習——

生徒が主体性をもって課題に取り組むためには、自由に活用できる一定の時間が必要であり、関わりやすい課題設定の自由度が認められていた方がよい。生徒自身の興味や関心の度合いが高ければ、課題に取り組む意識は高まり、作業も積極的・能動的となって、広く・深く社会事象を学ぶことが期待される。

このような教育的見地になつて、社会科の地理的分野と歴史的分野から、共通テーマと留意点を示し、二分野のうち一つを選び、個々に題名を工夫して決め、レポート作成することを夏季休暇中の課題とした。

(1) 地理的分野の共通テーマ「身近な地域の変化」

留意点

- ①身近な地域とは、地域の広さにとらわれず、調べやすく、まとめやすい範囲にすればよい。町内、学区内、区内、市域内のいずれでもよい。
- ②いつごろからどのように変化したかについては、昭和35年（1960）から後のことで、それ以前にさかのぼってもさしつかえないが、この30年間を中心にまとめる。
- ③地図や表など、資料をなるべくつけてまとめる方がよい。変化する前のようすと変化したようすとを比較できるようにまとめる。

④調べる方法は、地域の変化をよく知っている人にきく「聞き取り調査」を中心に、資料を手に入れて調べてまとめる方法などがよい。

⑤まとめの用紙は横書き原稿用紙（200字づめまたは400字づめ）を使う。

⑥まとめのポイント
いつごろから、何が（どんなことがら）どのように変わったか、その理由は何か（何が原因で変わったか）。その結果生活がどう変わったか、新たに起こった問題点は何か。

(2) 歴史的分野の共通テーマ「満州事変、日中戦争、太平洋戦争（1931～1945年）時代の様子——55歳以上の人から聞いた話——」

留意点①戦争に行った（本人） どこへ いつ そのときの気持ち 戦地での体験 食べ物 戦死 捕虜 現地の人の日本への感情 家族への思い 手紙 生きて帰ったときの気持ち

②戦争に行った（残された家族） 赤紙が来たとき 送別会 手紙 戦況 うれしかったこと 悲しかったこと

③疎開体験 いつ どこへ 現地での生活のようす 疎開の一日 戦争について当時どう考えていたか 食べ物 勉強 軍事教練

- 嬉しかったこと 悲しかったこと 病気
- ④学徒動員・女子挺身隊 どこで
何をどのようにいつからいつまで
一日の生活 空襲 戦死 願っていたこと
- ⑤1931 (昭和6)年～1945 (昭和20)年まで
の生活の変化 満州事変 日中戦争のこと
南京陥落の思い出 衣食住の変化 新聞
の変化 様々な訓練 12月8日 8月6
日 8月9日 8月15日のこと
- ⑥空襲のこと 空襲警報 防空ずきん 防
空壕 名古屋大空襲 愛知時計 豊川工廠

2. 一斉および班別形態による系統的指導

野外学習の実施にむけての事前指題では、学習する生徒にとって、「何が (What)、どこで (Where)、いつ (When)、なぜか (Why)」という社会的 (地理・歴史的) アプローチの基本が会得されるように系統性を意図し、学習形態は一斉型と班別型を適切に導入することによって、指導の効果をねらった。こうした教科サイドの指導は、主として社会科の担当教師が当たった。一方、基本的な生活指導の徹底には、学級担任が中心的役割を担うこととし、その指導内容は、社会的規範・道徳に関わる事項であるが、中1レベルでの内容量は多く、野外学習の実践が教師による密着同伴的な指導を前提としないだけに、当然のこととして事前段階における指導の比重は大きい。

このように指導する側の役割分担の採用は、教師グループ間の度重なるミーティングを必要とした。それは教科会と学年会、そしてこの両者を包括する拡大学年会であり、とりわけ指導上の責任をもつ教科担任と学級担任との密接な連携を重視し、これが指導上の核となって機能した。

野外学習の共通テーマに「国際理解」と「平和学習」を標榜し、総合化を視点とした取り組みであるから、社会科以外の特定教科に偏る必然性はなく、学級担任としての指導力に負うところが大きかった。教師グループのミーティングは、超教科的なレベルを指向し、学習および生活指導の基本的内容に対する共通認識を深めることであった。

そこで、事前指導の内容の骨子は、次のとおりであった。

第1回目 (10月11日1限) 一斉指導：野外学習のねらいは何か。

共通テーマと班別テーマの相関をどう考えるか

中高一貫教育における中1の位置づけをどうとらえるのか 野外学習に関する資料収集の仕方

第2回目 (10月22日5限) 学級指導および班別指導：班別編成、班長の選出、班内の係り分担・1人1役割

第3回目 (10月23日授業後) 一斉指導：班内の係と任務内容の発表

第4回目 (10月25日1限) 学級指導および班別指導：班別テーマの設定——「国際理解」と「平和学習」でそれぞれ1つ考える

第5回目 (10月29日5限) 一斉指導：テーマ決定の理由 (野外学習で学びたい内容) と質問事項を班単位でまとめる

第6回目 (10月31日授業後) 学級別班長会：班単位のテーマと学習内容の調整

第7回目 (11月5日授業後) 学年合同班長会：班単位のテーマと学習内容の調整

第8回目 (11月19日5限) 学級指導および班別指導：班別に野外学習実施用資料の作成——テーマ、コース、日程、訪問先質問事項の記入

第9回目 (11月27日までの授業後) 班別指導：引率指導顧問とのミーティング

第10回目 (11月30日までの授業後) 班別指導：引率指導顧問との2回目のミーティング

第11回目 (12月6日3・4限) 一斉指導および班別指導：実施前日に当たっての指導——安全および不慮の事態の対応など、生活指導中心

班別指導における引率顧問とのミーティングの内容

(1)各グループが顧問の先生と話し合う内容

- ①集合時間、場所を全員がわかっているか
- ②遅刻の場合、どうしたらよいか
- ③服装で注意することは何か
- ④必ず持っていくもの、持って行ってはいけないもの
- ⑤午前中の訪問先への交通機関、場所、相手の名前確認
- ⑥挨拶はどうしたらよいか
- ⑦接待を受けた場合の注意
- ⑧訪問先でのエチケット
- ⑨交通ルール (車内、プラットホーム、歩行のとき)
- ⑩写真のとりかた
- ⑪昼食弁当の場所、後始末
- ⑫午後の待ち合わせが必要かどうか
- ⑬解散時間と場所
- ⑭解散後の注意

(2)訪問先での質問事項について顧問の先生から助言をうける

(3)グループ行動で守らなくてはならないこと

(4)野外学習実施後、報告集と礼状について
各班で午前と午後にわかれて礼状をかく
報告集編集委員会 (各クラス男女1名ずつ選出する)

3. 事前指導の過程で実施した公開授業

先に述べた野外学習に関する一連の事前指導の過程で、第6回目の指導（学級別班長会）後、本校主催の「中等教育研究協議会」の公開授業に組み込み、「学級活動」の一環として位置づけた。以下に示す指導案にそって展開したが、学級担任と社会科の授業を担当する教科担任との複数指導者による実践は、数少ない事例ではないかと思われる。

学級活動——野外学習——指導案

日時：平成2年11月2日（金曜日） 場所：中学1年A組教室（指導者）中村明彦・丸山 豊
 中学1年B組教室（指導者）山本岩男・原 幸宏

- 1 単元 「国際理解と平和学習」を基本とした野外学習
- 2 単元の目標

総合学習的見地から「国際理解と平和学習」を基本とする野外学習の実践を通して社会認識を深めさせる。その為に、目的地・見学先の選定とテーマ設定に関し、生徒の主体性を生かした事前学習を小グループで展開させ、事後の学習では『野外学習報告集』の作成に取り組ませる。

3 教材観・生徒観

・マスメディアを通して世界の動向や平和についての情報は、中1レベル相応に入手できる。それらの知識や情報を断片的でなく系統的に学ばせる意義は深く、学級担任と教科担任との連携によるチームティーチングを導入することにより、総合的見地からの学習成果が期待できる。

・グループによる事前の準備学習に時間をかけ、目的意識を一人ひとりが明確にし、問題意識をもって野外学習に取り組む事で、学習の方法や基本的生活習慣の体得、集団意識の高揚をはかり、事後の学習においては野外学習の総括として深化と統合を意義づけたい。

4 時間配分

事前時数 11時間〔全体指導・学級活動〈班別〉〕・・・本時7/11

実施日 6時間〔12月7日(金)愛知県内各所〕

事後時数 2時間以上〔グループ毎に報告書作成〕

5 本時の指導

(1) 目標

- ・各グループ内における野外学習テーマを明確にするための話し合いをさせる。
- ・他のグループに対する質疑応答により、生徒同士での話し合いの場にさせる。

(2) 準備資料

プリント等、説明用班別作成の掲示物（各班）、班ノート（各班）

(3) 指導過程

過程	指導内容	学習活動	指導上の留意点
導入 10分	グループ学習の基本事項 議長による進行	野外学習当日の約束事について、各班で話し合い、発表する。	・班長が話し合いの進行に戸惑っていないか、班員が話し合いに参加しているかを観察し、指示を加える。
展開 35分	議長による指示 各班の野外学習テーマ発表と学習事項	(1)各班で発表の仕方を話し合う。 (2)各班別に発表する 〈B紙を掲示〉 ・話し合いの過程 ・テーマについて ・なぜこのテーマを選んだか ・調べ方 (3)質疑応答	・前時迄に準備できたものを班内で分担できたか、確かめる。 ・発表順は、積極的主体性によって決める。 ・質問に応じられるか ・自分たちの班をアピール出来るか ・動機がしっかりしているか ・積極的に発言できたか
終結 5分	教科担当からの助言 次時予告	野外学習のテーマについて各班の問題意識を深める。	・他の班の取り組みを理解し、それぞれ自覚を高めるように指導する。

IV. 中学生と国際理解

1. 教育機関で学ぶ同世代との交流

訪問先を選定する際に、生徒側からの希望を重視したが、同時に身近な地域のなかで、直接異文化と接する手だてはないかを考えさせた。通学区域を名古屋市域とする本校の場合、生徒の居住域が広いので、限定的とはいえ、身近に所在する外国人の学ぶ教育機関があげられた。もとより生徒は、それらの存在を情報として知るのみで、どのような学園なのか知る術もないので、逆に多くの生徒が共感を抱き、関心も急速に高まっていった。

生徒間における自由な話し合いを通して、名古屋市守山区の「名古屋国際学園」(NAGOYA INTERNATIONAL SCHOOL)と、緑区に隣接した豊明市に立地する「愛知朝鮮中級・高級学校」へ、それぞれ二つの班が訪問することになった。

これらの教育機関のうち、幼稚園児から高校生まで含めて260人程が学ぶ「名古屋国際学園」は、交流を深めるのに適正な規模であった。国際理解を深めるには、実際に外国の子供達と会って、お互いの話し合いを通して、外国の文化や生活が自分達とはどう違うのかを知ることであった。交流会を行なった後にまとめた生徒の『報告集』によれば、「①どんな国の人達でも心が通じ合っていれば、人種差別などがなくなり、仲良くできるんだ。②生活習慣や教育の内容に違いがあり、日本にあると思えない外国風の学校であったが話し合いによって、身近に感じられた。」と述べている。

一方、中学・高校生を合わせて900人の学ぶ「愛知朝鮮中級・高級学校」では、校内での母国語の使用や女子制服のチマチョゴリの着用を直接見聞したことによって、民族教育の徹底ぶりが強く印象に残ったようである。さらに、生徒同士の話し合いの中で、日本に帰化するつもりはなく、母国民としての誇りを持っていることを知って、一層その感を強くしたと思われる。

訪問した生徒の『報告集』によれば、「この学校に来ていろんな事がわかりました。私たちの知らないところで、いろいろなひどいことがあっただなんて……、日本はひどいんじゃないかなあ。」と、強制連行や強制労働を強要し、民族差別をした歴史的背景に言及している。

このように、直接学校を訪問して生徒レベルでの話し合いの場がもてたことは、得がたい体験となったばかりでなく、期待した国際理解を越える成果があったと評価している。

2. 公的機関を通して広めた視野

国際化、情報化に対応する都市づくりを推進している名古屋市には、国際理解を深めるのにふさわしい機

関がいくつか立地している。しかし、外国大使館や領事館などはほとんどなく、あっても訪問を受け入れてくれる程の規模ではなく、訪問先選びの段階で生徒はとまどいを感じたようだ。

対外折衝の結果、訪問先は「名古屋国際センター」とその建物の中にある「アメリカンセンター」、「愛知県庁の国際課」、「名古屋市役所の国際交流課」、輸出入物資の動向から学ぼうと「名古屋港管理組合」、治安問題はもとよりのことだが、近年における海外からの労働者の増加に伴って発生するトラブルにせまろうと「愛知県警察本部」、発展途上諸国との関わりが深い「名古屋国際研修センター」と「アジア保健研修所」に決まった。

これらの機関では、そこで働く専従職員からの「聞き取り」を中心にして、ビデオなどの映像や入手した資料との併用で国際理解を深めようというものである。中1レベルとの格差から生徒が消化不良を起さないために、知りたいことや学びたいことを予め「質問事項」として班ごとにまとめ、訪問先へ事前に送り届ける方法をとった。先方でも、当日にそなえて事前に調べておき、適切に説明するための工夫がしやすいかばかりか、生徒に解かる話が出来てよかったとの讃辞を得た。中1レベルの実態をベースにした説明や解説を望み、学習成果をあげたいとの願いからとった方法である。

6～7名で構成する班(少数グループ)であるために、生徒側からの質問もしやすく、諸問題への深まりと広がりも進んだものと思われる。

外国事情がどの程度理解されたか、わが国をはじめ県・市における国際関係から自分達との関わりで、どこまで視野が広められたかが一つの評価基準になろう。本校は、帰国子女も受け入れている高校との併設小規模校であって、英語の授業にAET制度を導入しているのも、それなりに国際化している教育環境にある。こうした環境で過す生徒が一定の目的と問題意識をもって国際理解を深めようとする意義は、同時に異文化理解に通じ、国際協調へと発展するものだけに、学ぶ教育的意義は深い。

訪問した公的機関の多くがビデオなどの映像を多面的に活用して説明されたので、間接的ながらも多様な異文化に接し、理解が深められたと思われる。生徒のまとめた『報告集』によれば、「①アメリカに行って(直接)見たい。②開発途上国の人々は、先進国に追いつこうとがんばって勉強してすごいな。③外人と呼ばれることに不快感をいだき、文化や習慣の違いを知ってとても勉強になった。④愛知県や名古屋市が、こんなに国際交流しているとは知らなかった。⑤国際化、国際化といって、かっこうばかりに気をとられて、一番

かんじんな生活がメチャクチャ（犯罪の発生）じゃいけませんね。」などと記され、価値観や生活習慣の相違に気づき、多くを学んだといえよう。

V. 地域からの平和学習

1. 平和を守り育てる運動から学ぶもの

平和学習を地域研究のテーマとする大胆な試みを実施して、教師として考えさせられたことがある。平和学習は「戦争を学ぶ」「平和の尊さを学ぶ」ことから出発して「どう生きるか」が問われてくる学習である。それは、教師自身に向けられる生徒たちの鋭い眼を育てる学習につながるということだ。

では、生徒たちは、この野外学習で「平和について」どんな学習をし、どう認識を変化させていくのだろうか。学習後の感想文、礼状及び野外学習報告集『地域で学ぶ国際理解と平和の学習』から分析を試みたい。

2. 「ぞうれっしゃがやってきた」から

上野動物園では、大戦中ゾウは殺されてしまった。その悲しい出来事を生徒たちは小学校の国語教材「かわいそうなぞう」で学んでいる。しかし、名古屋の東山動物園では生きのびて戦後子ども達に夢を与えたという。『ぞうれっしゃがやってきた』の著者、小出隆司氏より約2時間30分にわたり史実に基づき、ユーモアを交えお話をいただいた。「動物たちを助けるために、たくさんの人達が園長さんを応援してくれた。」ところに生徒は心を動かされ、一方で他の動物たちが殺されてしまった点に怒りを覚える。中学1年生らしい受け止め方でもある。「動物の命を奪うものは戦争だけではない、環境の悪化・人間による開発（破壊）は象をはじめ多くの動物を危機にさらしている。」こままでは教師も言うことができよう。しかし、「私は今後の人生を象を守るための運動に力を注ぎたい。これが私の夢である。」と小出氏に語られた時、生徒は教室では学べないことを学ぶ。そして氏がなぜ東山動物園の象の話を選びおこし、「絵本」としたのか。これが契機となって合唱組曲「ぞうれっしゃがやってきた」が生まれ、全国各地で今歌われているという事実からも平和を守り育てる意味を生徒たちは学んでいく。

3. 「戦争はこわい」から「おこしてはならない」という変化へ

熱田空襲の体験を小島守氏から学んだ生徒たち。「今でも戦争のために世間を離れ苦しい生活をしている人々」の存在はもちろん「ひどい原爆など受けると後遺症が残る」ことも知っている。「ベトちゃん、ドクちゃん」の話も知っている。つまり「戦争とは恐しくて悲惨なもの」という認識は、どの生徒も程度の差こそあれ持っている。小島氏から学んだことは、「戦争の恐しさ」から「戦争をおこさないためにどうした

らよいか」であった。戦争を再びおこさないために「空襲を記録する会」を発足させ、出版にこぎつけたという小島氏、「私は今とても喜んでいきます。あなたたち中学生という若い人達が戦争のことを知ろうとしてこうして訪ねてきてくれたことを……。」

教室では学べないことを直接学んでいく。

4. もう一つの戦争体験—韓国・朝鮮の人々の問題から、加害者の立場を学ぶ

平和学習はどうしても被害体験が主になり易い。広島、長崎、空襲体験。これは平和学習の基礎であり中学生はこうした被害体験を中心に感性的な学習からの重要性も指摘されてはいる。「地域」から「加害者責任」にどう迫ることができるのか、と悩み、在日朝鮮人、韓国人問題をとりあげてみたわけである。

国際理解として「愛知朝鮮中高級学校」を中1生徒に訪問させ、生徒自身の中にある差別観に気づかせるとともに、民族教育の意義を理解すること。この二点が加害責任を学ぶ第一歩であると考えた。『報告集』での生徒の「愛知朝鮮中級・高級学校」のまとめの一文を紹介したい。

『野外学習報告集』から
・祖国への自覚

朝鮮中級・高級学校では、生徒たちが日本の中で生活しながら祖国を自覚させることを重要視して教育しています。

そのため、学校内では、朝鮮語を使って生活します。放送なども全部朝鮮語です。学校を出てしまえばほとんど日本語を使っているみたいですが……。

では、どうして、祖国の自覚をとりあげているのでしょうか。

朝鮮は中国と並び古くからすぐれた文化をつちかしてきました。しかし諸外国列強の支配を受け屈辱的な生活をしいられた歴史をもっています。とりわけ第二次世界大戦までの日本の朝鮮侵略は、朝鮮独自の伝統的文化や言語、政治までにおよびました。日本の強制連行によって生み出された二世、三世の祖国に対する思いは、私たち日本人とは全く違う意味で、強く深いものがあります。だから朝鮮の子弟たちは、祖国の自主独立に参与するために自覚して学んでいるわけなのです。

朝鮮半島の国々への理解とは、まず平和教育が出発点になるのは当然である。

在日朝鮮人韓国人問題でもう一つのタイムリーな訪問があった。1944年12月7日、東海地方を襲った大地震は戦時体制下で報道規制され、具体的な被害の実態解明は戦後に持ち越された。その際、6名の朝鮮人女子挺身隊の少女が犠牲者銘板から脱落していることを

知った地元の研究者らが粘り強い運動の末、新たに犠牲者全員を記した碑を、1990年12月7日に建立、野外学習の当日はまさに東南海地震50周年、慰霊碑建立、2周年だった。この運動の中心となった、高橋信氏から学んだ中から生徒は『報告集』にこう記している。
・日本人の被害だけでなく、朝鮮、中国などのアジアの人々の被害の記録づくりがもっと追求されなければなりません。戦争犠牲者を出した一つ一つの地域に一つ一つの記念碑が作られ、犠牲者一人一人の記録が編まれることが望まれます (報告集 P114)。

5. 戦争遺跡の保存と研究から学ぶ平和教育

見晴台遺跡は当初より市民学習の場として発掘調査に参加し、その結果、考古資料館という形で保存され現在も学習が続けられているという市民考古学教室である。実はこの高台に大戦中、高射砲陣地が置かれ、その遺構と、それ以前の発掘との兼ね合いが注目されていた。ここ一、二年見晴台考古資料館の嘱託学芸員、池田陸介氏の調査により高射砲陣地の実態が明らかになった。戦争遺跡保存の声が高まる中、資料館の常設展示の現代コーナーとして、高射砲関係の出土品が展示され、縄文から現代に至る出土品を並べるといふ、考古資料館として新しい一歩をふみ出した点が評価されている。このような場所で、発掘調査をし研究している池田氏から生徒たちは興味深く学んだ。何よりも、池田氏自身が大戦中、他の市内の高射砲陣地で米軍機を迎え撃ったという体験、軍隊とは人間性を無視した上に成り立っており、8月15日の終戦を迎えた時の喜び、などの体験談は、平和の尊さを生徒に考えさせた。ぶ厚いコンクリート製の高射砲台の前に立ち、45年前に戦った跡、部品が地中に眠っていることを知り、発掘・調査にエネルギーを傾ける池田氏から学問研究の存り方を学んだに違いない。

6. 被爆体験を愛知でも学び、中3で広島へ

「被爆体験を中1の生徒たちに」という考えは、社会科の田中教諭からの提案であった。中3の広島、大久野島修学旅行の導入である。中1の生徒たちの事前の問題意識は「今はとても科学が発達しているので、戦争なんておこってしまったらどうなるのかは、だれもがわかっていると思います。」「僕達も戦争についてそんなに深く考えることはなかった。」「被爆者だからと言って特別教えてもらったことなんて一度もありません。」「昔のことを思い出すのはとてもつらいだろうなあ」といった中1らしいものである。

当日、愛友会 (愛知に住む被爆者の会) の遠藤氏、と水野氏から多くの写真や資料をもとに、1945年8月

6日を語ってもらった。帰校後の生徒たちの礼状からその意識の変化を探りたい。

・先日はありがとうございました。戦争のことといってもぼくたちは、テレビやマンガで見ているものでもありません。愛友会の人達の話の聞いていると想像以上のことがわかりました。今でも被爆者の人達が差別されていると思うと、かわいそうに思います。昔の悪い思い出をあまりお聞きしたくはありませんでしたが、話を聞いていると現実には知らされていないことがたくさんありました。

もう少しみんなで大々的にテレビ、新聞で (この被爆の事実を) 報道し、(私たちが) 目を向けたいと思います。お話を聞いたのをまとめてみんなに教えてやろうと思います。被爆者が差別されず、胸を張って生きていける世界になって欲しいです。今、外国の人達が核兵器を作りまくっています、核兵器がなくなれば戦争は終わらないと思います。もっと広島・長崎のことを世界に教え、戦争の恐しさはこうなんだぞと言いかけてたいと思います。……

VI. おわりに

中1野外学習を「教育の総合化」の大目標の下に「国際理解教育」と「平和教育」を統一的に捉え、かつ「地域から学ぶ」という初の試みは、初年度としてはそれなりの成果が得られたと思う。

中高六ヶ年教育のスタートとして教室だけで学ぶものではなく、自分たちが主体的に学習することの重要性、また本校ならではの少人数教育の特色を生かしたグループワークの体験といったものに留らず、やはり、世界とは何か、日本とは何か、自分とは何か、そして「平和な社会を築くこととは何か」といった教育の本来的目標に一步でも近づくことができたのではない。確かにこのようなテーマの下での指導は事前準備を含め実に多大なエネルギーを必要とする。また実施にあたり様々な問題も出てくる。しかし教育とはこういうものであり、手間・暇をかけることをためらっては、行事は何もできない。教室で、学校で、授業で我々教師が与えることができないものを中学1年生でも (中1だからこそ真剣に) 学ぶことができた点をうれしく思う。

実に多くの方々を支えられた実践であった。今、こうした受験に無関係で地道な教育を軽視し、葬り去ろうとする厳しい教育環境の中、本校の教育の大きな柱として、「国際理解と平和の教育」をめざしたものとして定着することを望みたい。